

ことでもある。なぜなら、悲劇は登場人物たちの一人称語りで行進し、すべての思いと行いが言葉によって明かされるからである。行為の始点であり、行為の内容を決定する熟慮の過程を知るとい意味で、悲劇で再現される行為を見ることは、その行為を実行することに比肩すると言いうるのではないだろうか。

アリストテレスによれば、徳の形成は行為によってなされる。それゆえ、行為を見ることが善き行為の一つの実践訓練たりうるならば、悲劇は友愛ゆえの活動をより善くするための一助となりうる。悲劇の上演はディオニュソス信仰に基づく国家行事であったが、アリストテレスは同じ共同体に属する市民たちの絆、すなわち社会的友愛をより善く、かつ盤石にする方法を、宗教とは別の、高貴な行為を再現する悲劇にみとめ、期待していたのではなからうか。

死を意味づける語り

——古代キリスト教周辺と死生学——

土居 由美

宗教をどのような視点から捉えるかという課題は宗教学における基本的問いであり、これについて従来様々な視角が提示されてきた。それらの一つとして、様々な意味づけ／解釈行為という視点から宗教を捉えるという仕方は、宗教学の普遍性或いはその多様な方法論の展開という観点からのみならず、死生学

との関連性においても改めて実践的であると考えられる。

そのような問題意識を念頭に置きつつ、死を意味づける／解釈する行為について、その典型的で具体的な一例として新約聖書福音書「受難物語」中の「闇」をめぐる表象から辿る。

新約聖書、特に四福音書においては、イエスの生と死が意味づけられ、その結論が提示される。その物語上のクライマックスは各福音書において受難物語中にあるといつてよい。この物語部において、実在の人であるイエスの死と生がどのように意味づけられていったのかという過程が詳細な分析によって辿られる。従来のキリスト教神学においては、この問いは「キリスト論」として表現されてきたといえるが、これに対してこの同じ問いは、死を意味づける語りとして広く一般的な視点に立ち宗教学的に記述されることが可能でありまた有益であるといえる。新約聖書の四福音書中、マルコ、マタイ、ルカの共観福音書受難物語において、イエスが死にゆく場面は、全地を覆う「闇」の記述によって始められ、この「闇」はイエスの死の瞬間まで継続する。

これらのうちマルコにおける「闇」の描写は、イエスの死を旧約聖書の文脈に語られる神による救済の業に連続するものと意味づけられたものである。その上で、その直前に生じる「闇」が旧約に表れる典型的な「闇」とパラレルに描かれていると捉えられる。マルコにおいて、「イエスの死」という悲惨な出来事は、旧約聖書の文脈を手掛かりとしつつ、なお広く世界に渡る神の救済の出来事と解釈が広げられて、その読者にイエスの死と共に「神の審判」次いで「神による救済の業」が遂行され

ると、自然な形でかつ明確に悟らせるよう編集されていると想定される。

これに対してマタイでは、その大半がユダヤ人改宗者であるとされる彼の読者に向けて、敢えて多くのユダヤにおける終末論的表象が絡められつつ「闇」は、マルコと同様にイエスの死と共に「神の審判」「救済の業」が成就することの前触れとして一層工夫が凝らされつつ、更に「イエスの死の出来事」を世界全体に及ぶ神の救済の業との解釈がなされて伝達されている。

ルカにおいては、「闇」は旧約の背景が受容されつつも、そこにその文脈を超えたヘレニズム・ローマ世界の更なる背景、即ち、偉人の死と結び付けられる尋常ならざる自然現象という枠組みが重ねられて描かれていると想定される。ルカにおいてイエスの死の場面は、「誕生物語」及び「幼年物語」とパラレルに、より広範な物語上のまたヘレニズム・ローマ世界の表象を用いた枠組みの中で、伝達の意図を持って人ならぬ特別な存在として解釈され編集されていると想定される。

このように、共観福音書における「闇」の表象はイエスの死の出来事の意味づけ／解釈を象徴的に表現するために編集されたものであり、その意味づけの軌跡を示す指標となる記述であることが確かめられると同時に、このような死を意味づける語りが世界宗教キリスト教の発祥に欠くことの出来ないものとして存在しているということが改めて確かめられる。

オリゲネスの著述活動と「テキスト共同体」

出村 みや子

「テキスト共同体」という言葉は特に目新しい概念とは言えないが、古代末期の地中海ローマ世界の宗教思想を特徴づける言葉として最近見られるようになった概念であり(G. Fowden, P. Brown, M. Niehoff, G. Snyder)、特に二―三世紀の古代アレクサンドリアの宗教的状况を記述するのに有効であると思われる。フィロンからクレメンスに継承され、オリゲネスにおいて発展を見た創世記一六章のサラ・ハガルの物語の聖書解釈を「テキスト共同体」に焦点を当てて比較すれば、彼らの宗教共同体が置かれた当時のアレクサンドリアの文化状況やホメロス解釈の文献学的伝統の影響を受けながら、各々が独自に聖書解釈を行っていたことがわかる。この創世記の箇所解釈は中世における「神学の侍女(*ancilla theologiae*)としての哲学」の起源となった他、アレクサンドリアの神学的伝統が多大な影響を後代の教会史に及ぼした点においても重要な意味を持つ。

フィロンの『予備教育』は創世記一六章におけるサラとハガルの物語を予備教育と哲学の関係を示すアレゴリー(寓意)として解釈する試みであり、その背景には当時のヘレニズム諸都市に住むユダヤ人にはこの物語を字義通りに理解することが困難となっていた状況があった。フィロンは族長時代の物語を、アレゴリー解釈を通じて当時の基礎教育や哲学の問題に移し変えているが、彼が聖書(「七十人訳(LXX)」)にギリシアの哲